2020 年 1 月 27 日

日税メールステーション 特別号
海外基本情報

第 46 回 台湾編（2）

メールマガジンをお読みの皆様こんにちは、株式会社コアブリッジの柳です。
今回から 2 回にわたって台湾の歴史についてお届けします。

台湾の歴史は、「他国侵入前」「オランダ支配時代」「鄭氏政権時代」「清領有時代」「日本支配時代」「国民党政権」「近現代」に分けることができます。
今号では、日本が支配する前までを、例によって思い切り要約して記します。

■地理的状況

先に、中国大陸から台湾本島にかけての地理的状況を記しておきますと、
　中国大陸東南部の福建省廈門(アモイ)-金門島(キンメン島)-澎湖島(ポンフー島)-台湾本島
のように、中国と台湾の間には重要な島が存在しています。

■他国侵入前

マカオ編の歴史の回
<https://www.nichizei.com/nbs/wp/wp-content/uploads/mail_bn/kh190926.pdf>で、「ポルトガルがマカオを領有した後、17 世紀に入りオランダがマカオを奪取しようと侵入してきたが、ポルトガルに撃退された」という旨を書きました。台湾が欧州人に知られたのはこの頃で、台湾島を船から見たポルトガル人は、その見た美しい島影ゆえ「イラ・フォルモサ(麗しい島)」と呼びました。現在も台湾が別名"フォルモサ島"と呼ばれる所以です。
当時の台湾は先住民の複数部族や中国大陸からの少数の移民が居住する島で、日本と中国の貿易の中継地であると同時に、倭寇や海賊の巣窟ともなっていました。
また、中国の歴代王朝（清の途中まで）は、台湾本島に対して積極的な関与はしてきませんでした。

■オランダ支配時代

海洋進出においてポルトガルやスペインの後塵を拝していたオランダは、やっきになってアジアへの進出を行い、オランダ東インド会社を設立し貿易を拡大しようとしていました。当時オランダはバタヴィア（現在のインドネシアのジャカルタ）を拠点にしていて、貿易の中継地を探しており、台湾の離島の一つである澎湖島(ポンフー島)を占領しようと艦隊を向け

ます。中国(当時は明)は軍勢を向け撃退します。オランダは先述のようにマカオ争奪戦に敗れた後、再度澎湖島に侵攻し、今度は占領に成功します。しばらく明とオランダの間で澎湖島を巡る抗争が続きますが、明はオランダとの間に「澎湖島撤退を条件に台湾本島の占有を認める」という停戦協定を結び、台湾本島がオランダの支配下に移ります。オランダにとっては離島ではなく本島の支配権を得られるという予想外の好事となったわけですが、これは、先述のように、明が台湾本島に関心を持っていなかったためです。
オランダは現在の台南の安平に上陸し、38 年間台湾を領有しました。
オランダにとって対策しておかなければならないことは、現地民の抵抗、そして、競合国ポルトガル・スペイン・イギリスの侵入です。こと、オランダに限らず後の日本支配においても、最もやっかいだったのが、先住民や中国大陸からの移住民による抵抗でした。「台湾では、五年に一度大乱があり、三年に一度小乱が起きる」と言われていたほどです。
このため、内外に備える軍事的拠点として熱蘭遮城(ゼーランジャ城)～現在の安平古堡～を、また、本来の目的である貿易の拠点も兼ねて普羅民庶城(プロビンシャ城)～現在の赤嵌楼、別名紅毛楼～を築きます。

左：台南にある赤嵌楼（普羅民庶城：プロビンシャ城）。
右：同じく台南にある安平古堡（熱蘭遮城：ゼーランジャ城）。

台湾、インドネシア、中国、日本の原産物を中継する貿易は、オランダに巨額の利益をもたらします。
貿易の中継拠点として台湾を狙っていたのはオランダだけではありません、スペインも植民地のフィリピンから艦隊を派遣し、台湾の東北部から侵入し、現在の基隆にサン・サルバドル要塞を、淡水にサン・ドミンゴ要塞～現在の紅毛城～を築き、北部を占領します。オランダがスペインを撤退させるまでの 17 年間、スペインが台湾北部を占領しました。

■鄭氏政権時代

この頃、中国大陸では、漢民族の明から満州族(女真族)の清に王朝が交代しようという時でした。

満州族に押され後が無い明は、海賊の頭領である鄭芝竜に助力を求め最後の抵抗を行いますが、結局清に滅ぼされます。

鄭芝竜の子の鄭成功は、漢民族でない清王朝を認めず、明の復興を誓い、清への抵抗を続けますが、状況は好転せず、大陸の東南部にある廈門(アモイ)と金門島(キンメン島)に追い詰められます。

鄭成功は廈門と金門島を息子の鄭経に任せ、自らは台湾に向かいます。澎湖島を占領した後、台湾本島に入り、オランダの軍勢を追い払います。これによりオランダの 38 年間の支配は幕を下ろします。抑圧者であるオランダを追い払い、台湾を開拓した鄭成功は、台湾において英雄です。

鄭成功は台湾を"東都"と命名し、中国東部の島という位置付けにし、明王朝再興の拠点としますが、一年も経たないうちに死去します。

父の死により鄭経が廈門から台湾に移ると、清国はすかさず台湾との間の交通を封鎖し、台湾を衰退させようとしますが、逆に密貿易が盛んになり、結果として台湾の人口が増え開拓も進みます。

鄭氏は、財源確保のため様々な徴税を行い、それが住民の怨嗟を買います。しかも、一族で後継者争いの内紛を起こし、末期的状態です。鄭氏政権を潰す好機と見た清は、台湾に艦隊を派遣し、鄭氏を降伏させます。鄭氏政権による台湾支配は 23 年間でした。

鄭成功の像。台南のいたるところに鄭成功の像が建てられています。

淡水にある紅毛城（サン・ドミンゴ要塞)。

■清領有時代

鄭氏政権を排除した清朝ですが、台湾の経営には相変わらず消極的で、反政府勢力や盗賊・海賊の根拠地になることを防ぐ程度でした。しかし中国本土からの移民者は増え続け、農業を中心に台湾の発展は進んでいきます。
1840 年からの清とイギリスによるアヘン戦争の最中、イギリス艦隊は台湾にも侵入してきますが、占領には至りませんでした。しかし、イギリスは、1856 年のアロー戦争後の天津条約により、清に対して台湾の淡水、基隆、高雄を開港し、キリスト教の布教を認めさせます。
また、同時期に日本から帰国したペリーは「台湾は貿易の拠点として占領すべき島である」と本国に報告しています。欧米列強の台湾への関心が高まってきたのです。
時を同じくして、明治維新後の日本も台湾に食指を動かしていました。

今回は以上で終了です。
ではまた次回お会いしましょう。

※本文中の数値や URL 等は執筆当時のものです

執筆者
柳　恵太（やなぎ　けいた）
株式会社コアブリッジ代表取締役。
ソフトウェア開発会社、メーカー、教育ベンダーを経て、2014 年に株式会社コアブリッジを設立。これまでの、システム開発の上流から下流、受託側から発注側、エンジニアからプロジェクトマネージャー、ユーザーと開発者、企画・営業・開発・提供、日本と海外、社員から経営者といった、組織における幅広い役割を活かし、主に IT 企業向けの人材育成やコンサルティング等のサービスを提供している。

情報提供元：

corebridge　株式会社コアブリッジ

https://www.corebridge.co.jp/

※本コラムは、https://www.corebridge.co.jp/column.html でもご覧になれます。